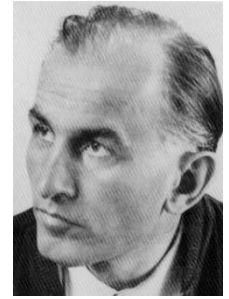


統合失調症のはじまり

Klaus Conrad 1905-1961



トレマ期

※俳優が目前に出番を控えている時に味わう緊張状態。

漠然とした圧迫感→緊張感の先鋭化→心的な場の狭隘化

- 「今にも何かが起こりそうだ」、「何かが差し迫ってくる」
- 「差し迫ってくるもの」の方に向かうよう強いられる。
→どの方向にも逃げ出すことができない。
- 自由でない、以前のように動けない、決断できない、拘束され、道は狭まる。

【とがめ】～から離れるように圧迫される。
【はげまし】～に近づくように圧迫される。

「差し迫ってくるもの」

私の人生にとって常に重大な意味。
必ず正か負。中立は決してない。
私を障壁に立ち向かわせ、緊張を増大させる。

「時間的制約」という障壁に追われ、「ある一点」に達する。

一点を超えると、可能性は2つに1つのみ。
敗北か勝利か・自己価値上昇か低下か。
中立に留まる道は閉ざされている。

臨界点を通り抜けると……
仮に自己価値低下であっても、障壁は取り除かれ、緊張感は緩む。

【トレマの消失】

- 「自明」「自然なもの」はない。

基底感情の亢進

思春期の危機
成長期の憂うつ
初期緊張亢進
自明性喪失→疑惑

圧迫→窮地

とがめられ、緊張が強烈に増大
状況とのつながりが断たれ、排除される。
内的な安全保障感が突然、崩壊。
「体験構造の変化」の「萌芽」

障壁突破→無意味な行為

欲動が内的な場全体に氾濫。
「窮地に拵なし」
通常なら厳格に遵守する障壁を、突破。
短絡的に外部の場の構造を破壊。

罪業感・負い目・良心の「とがめ」を伴う

初期抑うつ

彼岸と此岸を離断する裂溝→潔白の彼岸へは決して渡れない。締め出された。もはや「われわれ」ではありえない。所属感の喪失。自己固有の世界に放逐された。→独り此岸で贖罪するか、自己破壊で非合理の世界に逃避するしかない。

トレマ初期
内因性うつ病の特徴もありうる。
躁的・多幸的な脱抑制で始まることも。

○「ある患者の統合失調症が、内因性のうつ病で始まった」→否定不能
×「ある患者のうつ病・躁うつ病が、統合失調症で始まった」→想定不能
∴) 気分障害と統合失調症を同じ疾病単位として並列できない。

※「反応」的契機を推測する根拠（心因）の不在

- 「反応」的契機が推測されたとしても、推測に根拠は見当たらない。
→統合失調症が、葛藤状況から直接生じることはありえない。



基底感情亢進 → 自明性喪失 → 疑惑

われわれが心を騒がせることは――

人々が言ったことや行ったことではない。
人々が言っていないこと。われわれの背後でこっそりとしていること。
人々がこれからやろうと思っていること。陰でたくらんでいること。

妄想気分

「図」と「地」

- 通常、背景から浮かび上がった「図」に注意を向け、「地」は中立的であり、注意を払わない。
→背景である「地」に中立性が失われる。
- 背景にあるもの、主題の外にあるものが、身を隠して待ち伏せし、攻撃的な様相を帯びる。
「周囲は『不幸』を知っているが私をわからせないまま放置している」
- ありきたりの不幸を超え、自己の存在を、根底から疑問視せざるを得なくなる。

アポフェニー期



妄想・声（幻聴）の顕現

- トレマの緊張の中に芽生えていたものが急速に顕現。
- 初めは【妄想の主題】のみが現れ、声として聞こえる。

アポフェニー体験

- **異常意味意識**（異常な意味づけ）の展開・体験構造（体験の仕方）の変容
- 知覚・表象・非表象的意識・思考と、あらゆる志向性の諸態様に浸透。いかなる現象も全く新しい色調に。
- 出会うものの意味は「自明」。周囲の人が疑義を抱くこと自体が理解できない。
- 「啓示」を受けた人のようにふるまう。

統合失調症の中核的態様

妄想知覚

なぜわかったのかを問うことなしに、ただちに意味を知ってしまう。

はじめは知覚・体験された【外空間】だけに及び「仕組まれている」

イメージなどの内界【内空間】へ波及「させられる」

はじめは、意味連続性は保たれる
状況全体を見渡すことは可能

「すべてが自分の周りを回っている」
自己にとらわれざるをえない体験へ

世界は秩序を保つが、中心の位置のみが奇妙
ひとつの体験から、周囲の状況の一部が支配的に

さらに、強いイメージ性を帯びる
脈絡がなくなり、意味連続性が断たれる
脈絡のない古色蒼然とした
啓示的なイメージの洪水

外界のアポフェニー 外界から迫る異常な意味

- 「おかしなもの」が、「にせもの」「標識づけられたもの」「ふりをしているもの」として周囲から際立つ。
→ 注意を向けざるをえない。
- 事物の背景は前景へと押し迫り、何かを意味してはいるが、不明のまま。「意味が隠されている」「何かぴったりとしない」
- 眼差しがどこに向かおうとも、**出会うものは自己と関係があるかのように、世界が変容**。
→ 自分を試す。あらゆるものが、こしらえられ、仕組まれ、準備される。
→ 体験をひとつひとつ、「これでいいのか、まちがっていないか」と確かめなければならない。
- 「試される場」「待ち伏せ」「畏」

予め仕組まれた方式で進んでいた。
全てが自分のためにだけに予め用意されていた。
筋書きの全体の中に参加している。

「何かの目的が追及されていた」
「まわりくどく、そらすような答えが返ってくる」
「人はみな指示を受け、申し合わせされ、自分のために派遣されている」

「わざと目立たせている」
「見せかけの間違いをわざとずらす」
「気づくかどうか注意力を試している」
「仕組まれている」

- アポフェニーの変容を被るのは、「図」になりやすいもの。「目」に飛び込んでくるもの「自分をおしつけてくるもの」
- 背景に属する広い領域、注意の向かない自明なものは、変容せず残る。
- アポフェニーが全知覚場を襲えば、何一つ逃れられない。

主題の変換・意味連関の変化

- 感覚・知覚から与えられる対象は客観的には何ら変化していないが、一挙に独特の調子、意味を帯びる。

- 呼び声が、人違いだったとわかったら——私だけの世界から、他者への世界へと、境界を踏み越える。
- たまたま出会った人と話すうちに、遠縁だったと知った時。

例えば——列車の窓外の風景

列車の動きを無視し、自己の立ち位置が静止していると思い込んでしまったら、風景が運動していると感じる。

自己の“能動性”を実感できなくなってしまうと——

自己の動きを無視し、自己の立ち位置が静止していると思い込んでしまったら——

周囲の事物が、自己の側を通り過ぎ、周りをまわりつく。街を歩けば、道路も家並みも街路樹も、自己の側を過ぎ去り、退いていく。周囲の事物がどのように運動しようとしているのか、さっぱりわからない。周囲のあらゆる運動が操られているようだが、びたり、びたりと正確に決まって、驚く。「遠近法」など頼りにならないが、わが家に戻ると、怪しげながらも親近感を覚え、安堵する。

妄想知覚の3段階

- ① 知覚された対象は自分に向けられているが、なぜかがわからない。
∴) 対象が、注意をますます奪う。
視野の中には「何か」があり、注意を強いる。
- ② ひとつの主題に長く留まると、なぜかが即座にわかる。
Ex) 「それに気づくかどうかを試すために、わざわざそこに置いた」
- ③ 知覚対象が、完全に特定の内容を意味する【本質特性の優位】

知覚連関が緩み、質的なものが解放

ゲシュタルトの質は、非現実的であっても、連関性のある「背景」の前に現れていた。「背景も」状況構造の中で把握できた。

一切の構成物が融解、本質特性の中に消去。知覚場の意味連続性が引き裂かれる。

夢体験と類似 【アポカリプス期】

【本質特性の雲】

個々の事物の中に閉じ込められ、妄想の中で呪縛が解かれて乱舞。

既知化体験と未知化体験

知覚の変化ではなく、「共に感覚する」働きの病的変容

- なじみ深かったものが初見に、初見のものが既知となり、不気味に変化した世界のただなかにいる。
→あらゆるものが「まがいもの」として体験され、私を試し、あざむくために、わざわざしつらえられている。

相貌的類似性

顔の識別→繊細な能力が発達→誤認が起こり得る

- それまで気づかれなかった「類似性」が、一挙に強く前景化し突出
→【相貌的特性】が【構造的な質・対象的特性】を圧倒→知覚の確実性が消失
→ごく些細な特徴も独特に突出し、【初見の相貌】に【既知の相貌】が現れる。
- 同一と再認することも、区別することも、あり得ない。

本質特性の突出

- 類似の相貌を同化し、同一と誤認。
- 一方、同一のものが同一であることを否定。

妄想的な人物誤認の様式

「変装しているのだろう」

- ①未知の人を、無条件に**特定の**既知の人と考える。
- ②未知の人を既知の人と考えるが、矛盾とわかる。
- ③未知の人を既知の人と考える。
- ④未知の人と認めている。
- ⑤漠然とした既知性。

「驚くほど似ているがやはり違う」と言い、
次の瞬間、その人として話しかける。
→絶えず変転する。【視覚場の競合】

既知の人と似ている印象に驚きながら、
不自然でない説明を持ち合わせない。

会ったことがあるのではないか、
というほんやりとした感じ。

- 私は、**すべてに対して、まったく受け身**である。
→この**“芝居”**を企てた、**全能な神のごとき演出者の存在を前提としなければ、おかしい。**
→誰かが企て私を監視し、私から何かを得ようとしている→「誰なのか」と、問い焦る。

万能体験

妄想知覚～精神重力の法則

【世界から自分への作用】
【自分から世界への逆方向の作用】 } 対

- 姿を現さない秘密に満ちた「何者か」の存在を体験。
→「何者か」は私の世界を操縦し試練をつきつける。
→一方で、**自分自身も、同じような秘密の方法で、世界を動かすことができる。**

アナストロフェ

乗り越え

- 自分から抜け出て、自分自身を見ること。
- 観察者の目・神の目・他者の目
- 他者と共にある存在として自己を観察。

- 「すべてが私の周りを回っている」**。世界の中心に追い込まれた**「私」**。
→受け身的に自分が存在するというだけで、世界を支配している
→**世界の受動的な中心**
- 世界の中心から抜け出て、自分を“相対化”し、他者と自分とを並列することができなくなる。**「乗り越え」の不能。**
→**自己にとらわれ、何一つとして自己との関連から離せなくなる。** ブトレマイオスの態度から、コペルニクスの態度への変換不能

- 我を忘れて前だけを見て生きている時、事物に没頭している時、アポフェニーは沈黙。
- 事後的・反省的に、「見張られている」ことが意識に上る。
- 周囲の構成部分に対する「異常な意味づけ」は、反省的態度の中で体験される。
→次々と注意を向け、反省的態度をとることを強いられ、前だけを見る生き方を中断させられる。

「にせもの」「仕組まれたもの」
「注意を試すために用意されたもの」
「はめられていた」という確信

反省の癒攣

- アポフェニー期では「乗り越え」が不能。
- 固定化期で初めて消失。

アポフェニー：主体との関係における、**世界と対象の変化。**
アナストロフェ：「世界の中心にある」という**私自身の現れ方。**

時間構造と気分性

体験野のゲシュタルト崩壊

体験の時間構造が侵される

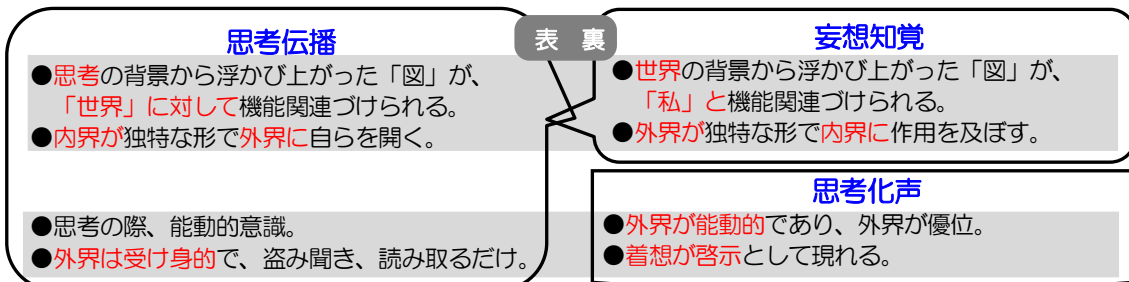
後に振り返り

「その時は死んでいた」

トレマ期	アポフェニー期	一期
中立的な緊張にあった者	中立的観察者→極限的興奮 →極から極へと揺れ動く	世界没落体験 神となった体験
抑うつ的・不安であった者	自殺衝動を伴う不安発作 抹殺体験・罪業体験・罪責体験	虚無体験 世界没落体験
軽躁的に興奮していた者	興奮し続け思考が飛躍 奔逸・多動・万能体験	神となった体験 世界支配体験 緊張病性の錯乱

内空間（表象）のアポフェニー

- 着想は変容して「啓示」となる。
- 外界の意味性・内界の内容が開かれ、内界と外界と交通。内界の透明化→思考は万人に開かれてしまう。思考の音声化。



それまでは、「降りてきた」「自分の中に入って来た」と体験。「吹き込まれ」「押しつけられた」「頭の中に押し入ってきた」と体験。

●思考伝播から思考化声が発生したり、思考吹入が命令や脅迫の内容を語りかける「声」に。→考えを聞かれる体験【思考伝播】と【思考化声】は、程度の差に過ぎない。



身体領域のアポフェニー
被影響体験

衣服の触感など、**感覚場の背景**をなしている感覚体験が、突然、**前景**に

凝集思考

- 互いに無関係で、偶然に続いて生じたもの→溶け合い、干渉し合い、全体をつくる。
- 常同性・紋切り型・慣用句の不正確な適用。
- 思考は言語的に結晶化せず、熟さないまま次々と集まり、凝集塊に。

反省が身体のあらゆる動きに及ぶと、「作為される」「操られる」事態に

皮膚～温痛感・触圧感・深部感覚
覚醒中どの瞬間でも複雑な位相をもつ
「作為され」「わざとらしく」「意図的」と体験

物を手でつかむ

【物】に注意が向く→【運動】は非反省的に
【手の運動】に注意が向く→反省的に

【反省的な動き】アポフェニーが侵す。
【非反省的な動き】アポフェニーを免れる。

C) 自動性—意図性の解離

アポカリプス期

意味連続性がない啓示的イメージの洪水

- 緊張病体験 ●行動を表出するばかり。
- 話す内容はまとまらない。
- 話し方を行動様式としてのみ見て取れるばかり。「本質」となり、「本質」の音がする。
- 思考・身体感覚が自己に所属しなくなる。
- 体の動き・圧覚・性的感覚を、「電流」「つくられたもの」と体験。
- 身体の連続性が失われる→身体の寸断体験。「脳が背骨にのめり込んだ」
- 自我の連続性も一過性に消失。「糸で操られる」
- 意味の連続性がない。「私は私でない」「既に死んでいる」
- 「断片」「光景」「個々の部分」しか思い出せない。

眼や耳に現れるものが、語りかけてくる。
私が先に**憶測したものを、呼びかける声**として聞く。

眼も耳も**常に新しいものを追う**
「本質」を開花するには時間が足りない。

束縛を解かれた本質が、その都度舞い上がる

知覚・思考関連も弛緩し、すべてが次々と過ぎ去り、
新たなものが浮かびあがる。
イメージが間断なく流れていく。
【本質特性の雲】の解放・「本質」の洪水
イメージが全体場に氾濫する。夢の体験場と類似。

固定化期

回復の段階

- アポフェニー体験の一部消失・一部残存
- 「乗り越え」可能に。
→外から自分を観察することが可能に
→変化は自身の中で起こったとわかる。
- 「ひょっとすると思いついてはなかったか」
- 自己価値の高揚**
- 妄想の発来時、根本的な自己価値低下
→固定化期に至り、**代償的な自己価値高揚**。
- アポフェニーの退潮
→体験に**目的論的な意味の価値**が付与。

残遺状態

残遺性欲動喪失徴候

- 統合失調症性欠陥・永続的。 ●落ち着かず気が滅入る。
 - 個人を超えたことには集中できない。 ●通俗的
 - 内的衝動・決断力・集中力・持久力の欠乏。
 - 態度や振舞い、目的への取り組みに、緊張の喪失。
- 欲求緊張力・エネルギー
- 志向・回避のいずれかに向かう
→緊張緩和を求め、欲求を満足
 - 次々と緊張システムを形成
→エネルギーを消費
 - エネルギー・ポテンシャルの減退**
- 壊れたぜんまい症候群
いかなる欲求緊張も形成できず、
停まった位置に留まり続ける。

●残遺がなければ完治しうる（.:）残遺は統合失調症に特異的な変化。

●「コベルニクスの転回」「乗り越え」可能な水準に戻るか
→【エネルギー・ポテンシャル】の喪失の程度による。

統合失調症の診断を統一できる可能性
【アポフェニー】【アナストロフェ】
【エネルギー・ポテンシャルの減退】を基準点に